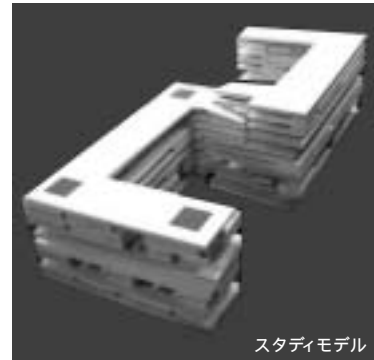


青森市北国型集合住宅国際設計競技 特別賞受賞

本杉研究室



スタディモデル

このコンペは2001年9月、青森市の主催で行われました。総事業費約80～90億円が予定されている実施コンペで、北国ならではの新しい集合住宅の提案を要求し、中心市街地の活性化、雪をプラスイメージで捉えることのできる北国ならではの都市空間、地域コミュニティの形成、高齢者や障害者への配慮、子育てしながら生活できる施設環境、エコロジーや健康への配慮、都市景観に配慮した外観・デザイン等が求められていました。

審査員が安藤忠雄、ジャン・ヌーベルの二人だけというのも特徴的でした。こうした背景により、応募作品は国内外51の地域から総数897点（国内527件、国外370件）寄せられ、国内外から著名な建築家の応募が多数ありました。そして、今年2月5日には最終審査に残った7作品が設計者によりプレゼンテーション、講評されました。最終審査は全て公開形式で行われ、その場で最終順位も決定されるという大変透明性の高い仕組みでした。残念ながら最終審査には残れませんでした。この中で私たちの作品は19点の「特別賞」の1点に選ばれました。

PROCESS

コンペは、本杉研究室として単独でコンペに参加しようというところから始まりました。今までは、個人や高宮研究室と合同という形でやってきたため、進め方も気持ちも、今までとは異なる新鮮なスタートとなりました。

まずは敷地調査へ

私たちのほとんど全員が青森は初めてだったため、地方独特のコンテクストを探ることから始めました。しかし、雪国特有の「雁木」や「退雪場所」などはすぐに見つけたのですが、街全体としては、どこにでもありそうな地方都市市街地の1つという印象でした。戻ってから写真や地図を眺めてばかりいましたが、どうにもピンとこない日が続いていました。ある時、駐車場を地図上にプロットしたら思いのほか多いことに気付き、そこから住居・駐車場・都市生活をどう組み立てるかのヒントを得た感じです。

ヴォリュームスタディから

まず求められているプログラムを建物に当てはめると、所用の住宅機能だけで容積率のかなりの部分を占めること、さらに提案すべき都市的機能やコミュニティ機能を加えると、かなり大きなヴォリュームとなることがわかりました。しかも、駐車スペースや採光・通風を考慮してヴォイドや空隙を計画するとなると、それらを全て低層に収めることは、なかなか困難なように思われました。敷地が商業地域であることから法規的な制限は比較的少なく、かなり自由に建物を計画できるのですが、計画建物自身で日影を作ってしまったら、近隣の影響を与えることが留意点となりました。



1階広場部分



立体化した道路



住戸横付け駐車

都市型集合住宅はどんなものであるべきか

一方、大きな課題として集合住宅の在り方が問われていました。北国ならではの提案、雪を楽しみ、親しむことができる建物、そして集まって住まうということへの新しい提案が求められていました。しかし、都市型の集合住宅として、低層部に公共施設を配置し、上層部に住戸が配置されるという一般的なコンプレックスには最初から懐疑的でした。こうしたステレオタイプ化した形式では、住宅と都市とが乖離してしまい、集合している意味合いや都市的な複合とはいえないのではないかと考えました。

そこで私たちは、街から低層部へとシームレスにつなげる、その関係が住戸まで続く、住戸を都市と並列に位置付ける、都市空間の公共性を計画全体にもたらず、住戸プライバシーを確保しながら、ライフスタイルの変化に対応する柔軟性を持つ、これらのことを考慮し、都市を構成している要素がそのままこの計画建物内に息付くよう扱うことを考えました。

街の心臓（道と活動）を連続する

それを実現するために、「道」を3次元的に建物内にとりこみ、外部と内部をひとつの街として連続させました。車と人が共存し合う生活・街、住まいと各種都市機能が入り組んだ街、立体的な連続性が街を再構成し、賑わいと活気を呼び込むことが目的です。これにより、私たちの案の特徴である立体街区と上層階への車の乗り入れが生まれました。

中心市街地であっても車社会という現実からは逃れられません。車と人がいがみ合いお互いを遠ざけることで安心するのではなく、共にいることで環境を向上させていくことが今後ますます必要とされるのではないのでしょうか。道を取り込み、街の立体化を唱えるからには、200の住戸全てに駐車場があることは絶対条件です。さらに複合機能の利用を高めるために、車を積極的に受け入れる空間が必要でした。最低でも300台の駐車を確保することを考えました。しかも、車が停車していない時には

ポケットパークにしようという提案です。

利便性を保証する住戸横付け駐車

地方都市は車社会です。戸建て住宅と同様の利便性・安全性を保証しなければなりません。そこで、各住戸に横付けする駐車場とし、door to doorで家 職場 商店 社会施設等が直接車で結ばれている生活を建物内外で可能としました。もちろん徒歩や自転車で行くことも可能です。つまり、この集合住宅では家の前から街が始まっているのです。ここでは、街中を歩くようにショッピングをしたり、気分転換をしたり、遊んだり、おしゃべりしたり、公園へ行ったりすることも可能です。これらによって冬季でも活発なアクティビティを確保することを考えました。

北国型住宅に対するアイデア

冬温かく、夏涼しい暮らしを考えて、道と住戸の間に中間部を設けることにしました。それはいわば「風除室」の拡張版です。単なる前室として捉えるのではなく、様々なアクティビティに対応できる場所へと変容し、街との接点（視線、領域、関係性）とすることを考えました。

そこは、通行量が少ない道・駐車場とつながり、しばしばテラスになり、コミュニケーションスペースにもなります。住戸と道の中間部は現代的な雁木として環境的に緩和された空間で、住まいと道・各種アクティビティをつなげます。夏は開いて風を通し、冬は閉じて冷気を遮断します。そして、道に吹きつけられた雪は、側面の小川（排雪溝）から庭の池へと導かれます。

三層構成のメガフレーム

車が高層部まで乗り入れることになり、通常の建築とは異なる構造が必要となりました。3層で1単位となるユニット4段を均等に配置された6つのコアで支える大きな棚のような構造です。各ユニットは1・2層が歩車共存ゾーン、3層は歩行者のみとし、両者の関係にバラエティを与えています。1層は大スラブで2層目はそこ



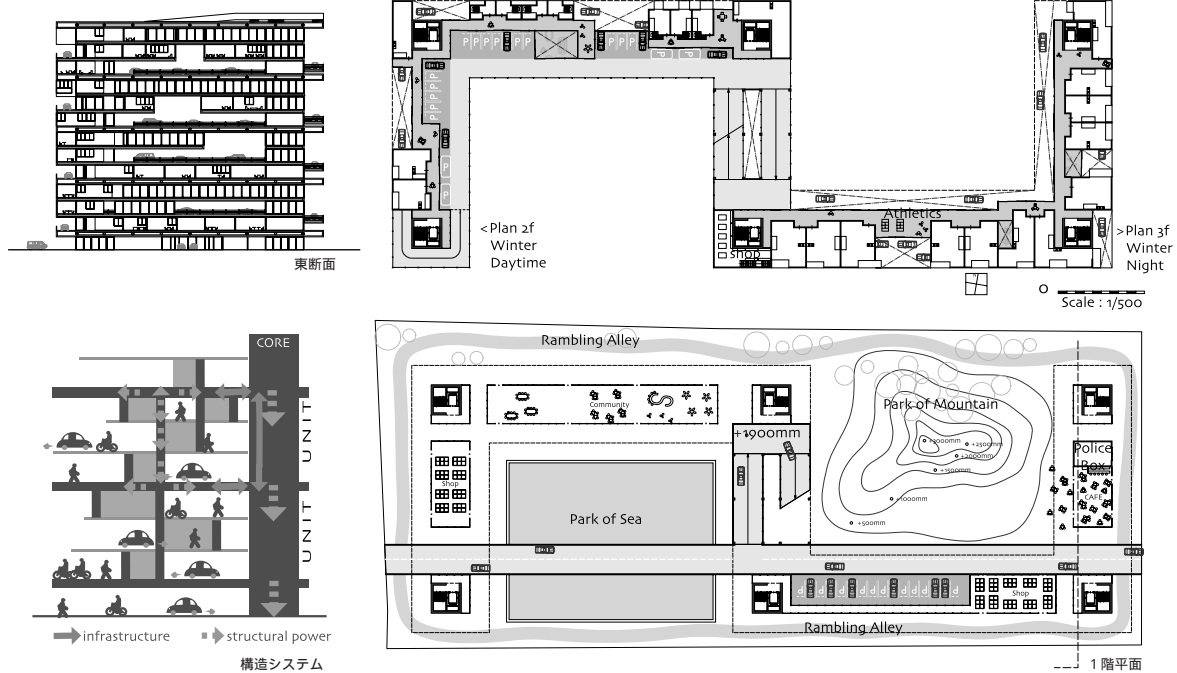
道と住戸の間の中間部



つながるアクティビティ



空間のヴァリエーション



から建ち、3層目は基本的にぶら下がるという構造形式です。これにより住戸やその他の機能は構造から解放され、融通性のある計画がもたらされます。大スラブ内に設けられた空気層は、暖気や冷気を取り込んで循環する快適なシステムを支援します。

配置・外構

全体の形を巡っては幾つものスタディを繰り返しました。最終的には、採光や外部との接続、プライバシー確保のためにS字のヴォリュームとしました。そして、このヴォリュームによりできる2つの広場を青森のランドスケープの縮図（海と山）として位置付け、北に広がる海と、南の山なみを入れ子状に配置しています。

公開審査@東京大学

公開審査は、上位7チームが自らの案をプレゼンテーションし、審査員によって質疑応答が行われるというものでした。会場が小さく立ち見ができるほどの混雑で、その分熱気に包まれている感じでした。登録番号順にプレゼンテーションが進行し、オランダからの参加チーム Atelier Kempe Thill Architects and plannersの提案が発表された時は本当に驚きでした。彼らの提案が私たちの提案と限りなく似ていたのです。上層部まで車が入り入れられること、2層おきに車道が走っており、そこに建つ住戸を戸建てのように扱っていることなど、全体の形は異なっていましたが、基本的思考がうりふたつでし

た。J.ヌーベルは特に気に入っている様子でしたが、結果的には優秀賞（2位）に終わりました。見ていた私たちには何とも歯痒い結末でしたが、同時に自分たちの案がこのテーブルに乗れなかった悔しさも味あわせられました。ちなみに最優秀賞となったカナダ人チーム案は堅実でスマートな提案でしたが、新鮮みには欠けるように感じました。

苦労・苦悩

作業当初は、毎回全員がそれぞれ案を持ち寄って話し合うという方法で、そうした沢山の考えを1つの案に集約していくことが何より難しい作業でした。険悪なムードになることもしばしばでした。しかも、車を家の前まで、上層部まで引き込むことが重要であるとした時点から新たな問題点が増えました。車のための斜路とその位置、住環境への影響と対策、周囲への配慮とつながり、全体ヴォリューム構成とデザイン等のスタディに多くの時間が費やされました。何より、車路を上層階まで導入することによって大きくなってしまいうヴォリュームについては多くの話し合いがもたれました。途中、何度も妥協案ができましたが、簡単に解決してしまうのではなく、多くの可能性を繰り返しスタディすることによって、最終的にまとめていくことができました。

楽しかったこと

結果、賞をとれたことが何より楽しかったことであり

ますが、反面、やはりとても悔しさもあります。最終審査まで残れたのがオランダチームで、自分たちでなかったことです。同じコンセプトでも、それを形にするものの難しさを感じました。

コンペに参加していた若色研究室、高宮研究室等と一緒に頑張ったこともいい思い出です。たまに探り合ってみたり、一緒に夕飯を食べたりしながらも、競い合って学ぶ楽しさを経験しました。ワークショップに来ていたダルムシュタットからの学生たちと交流をもてたこともよい経験でした。また、夏休みだったためコンペだけに集中できたことが幸いでした。おかげで夏休みがまるまるつぶれてしまったのですが、終わった後は非常に充実感があり、とても有意義なことであったと感じました。

大変でしたが、今回のコンペに参加したことによって得たものはとても大きかったように思います。そして、頑張れば大きなコンペでも評価されるものなのだ証明・実感できたことは非常によい経験でした。今回は特別賞でしたが、次回はよりステップアップができるよう頑張っていきたいと思っています。

(梅田 綾・日下部寛之・平井直樹・本杉研 M 1)

構造協力者からのコメント

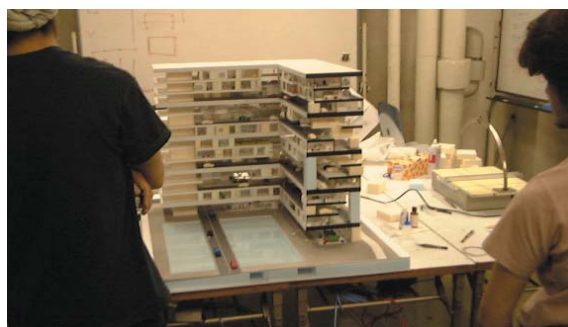
「マンションの玄関先まで車で行く!？」、初めは少し驚いたものの、雪国で車社会、そこにある問題を解決する方法としては、とてもユニークで面白い! と思いながら自称エンジニアの立場で参加させてもらいました。実際の建物を様々な視点で考え、議論し、スタディする。普段とは違う刺激を受け、改めて建築の楽しさを感じ、そんな機会を与えてもらったことに感謝しつつ、次の機会を心待ちにしたい。強いて言えば、もう少し早めに声をかけてもらえば、なお嬉しい。

(宮里直也・斎藤研 D 2)

今回の応募登録は4,000以上ですから、このコンペに挑戦した人たちは世界中で1万人以上になります。そんな中で研究室の大学院生と一緒に「特別賞」に選ばれたことは大きな成果です。学生でも世界と互角に戦える、この気持ちが大切なことで、私たちに勇気を与えてくれたことは確かです。でも、最優秀になれなかった悔しさも残る。つらい・苦しい・悲しい、でも楽しい・嬉しい、だから繰り返す・諦めない、こうした経験が私たちを成長させてくれることを学外でのコンペ活動を通じて私自身学んできました。消耗もしますが、様々なことを考えるきっかけになることが重要です。ろくな睡眠時

間もないのに、コンペに向かっている学生たちの顔は輝いていて美しい。ただし、これはほんの一步に過ぎません。一人一人がこの顔をいつまでも持ち続けていくことが次の鍵でしょうか。コンペでも普段の課題でも、様々な価値観に向き合い、空間的なヴァリエーションを考え、そこから合理的かつ想像力に富んだ案を発見することで同じです。自分もそれに挑戦してみようという人が増えてくれたらいいな。

(本杉省三・教授)



スタジオの様子

[コンペ参加者] 本杉省三・宮里直也(D 2)・阿藤俊博(M 2)・新野高史(M 2)・梅田 綾(M 1)・日下部寛之(M 1)・平井直樹(M 1)・水野 聡(M 1)
[協力] 本杉研究室4年・ゼミナール